
魔術同好会！！

ラグナウルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術同好会！！

【Nコード】

N5501P

【作者名】

ラグナウルフ

【あらすじ】

私立蓮邦学園。そこではある同好会が存在していた。

魔術同好会 その名の通り、魔術を調べ、行使し、世界をより良くしようとするそんな同好会。ちなみに部活としては認められていない……。

そんな彼等の敵はただ一つ！！生徒会である！！

「兄さん！！　なんでそんなにわがままばかり言うのですか！？」

「魔術はこの世界を救うために必要なんだ！！　だから、生徒会には消えてもらおう！！」

大体そんな感じ。

第一話 魔術同好会の人達（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する名称は実際の団体などとは全く関係はないはずです。
ええ、無いっただけなんです。

第一話 魔術同好会の人達

私立蓮邦学園と呼ばれる学園がある。PTAからも受けが良く、世間的に見ても問題は無い学園だ。

しかし、ただ一つだけ問題があるとすれば……、

「さあ、今日も楽しい同好会を始めようか!!」

俺の声に反応し、2人がこちらを見た。

1人は男でちよつと気弱そうな雰囲気のある”男”だ。たとえ女っぽい容姿だろうと、彼は男なので注意。

もう1人は女で、とてつもなくお嬢様雰囲気かムンムンとした女の子。気品があるが、わがままで扱いの困るお嬢様だ。

2人はこちらを見た後に、発言をした。

「で、でも薫君……」

「どうした、裕也？もしかして俺に抱かれなくなっただか？」

「そういう話じゃないよ！？ほ、僕らしいのに勝手に会議を始めちゃって大丈夫なのかなって……」

「そうですわね。私達だけで会議を始めてしまつては、恵理菜も蜜柑も怒ってしまうのではなくて？」

「いや、とりあえず会議だけでもしておこうとおもつてな」

俺の名前は一堂薫、三年生だ。ちなみに自分で言うのもなんだが、イケメンである。

小学校の頃から告白された回数は数知れず……まったく、嘆かわ

しいことである。俺は女には興味ないのだ!!

俺の対面の席でオドオドしているのは幼馴染の双葉ふたば 裕也ゆうや。俺の好きな男の子である。

何度も俺のこの気持ちを伝えたというのに、未だにYESはもらえない。イケメンなのに、俺……。

あ、その隣でウェーブかった髪をかき上げたお嬢様は三枝さんぐさ 弓ゆみ。高飛車お嬢様である。

後、この同好会には2人女の子がいるが、男が他にいないってどういうことなんだ!? まったく……。

「ところで、薫はこれからどういった会議をなさるつもりだったのですか?」

「フム、我らも三年生となり、生徒会も今年のメンバーが決定している……。そろそろ向こうも行動を起こすのではないかと思っただけ。つまり、その生徒会の動きを予測しておこうとおっしゃるのですね?」

「うう……。結局今年も生徒会と争うんだね……」

「当たり前だ。俺達の目標はこの学園をより良くする事であり、その為には生徒会が邪魔となるのだ」

「学園のことは生徒会に任せれば良いって僕は思っただけ……」

俺はそんな裕也の言葉に歎息たんそくをもらした。

「やれやれ、去年一年で分かっていたはずだが、俺達の行動はすべて生徒会に阻止されているんだ!! だからこそ先に生徒会を倒してしまうべきだと考えているんだよ。さらには今年の会長はアイツだしな。用心しておくに越した事はない」

「……サバトや悪魔召喚はさすがに阻止されると思うよ。しかも、今年の生徒会会長は凜りんちゃんだろ?」

「その名を私の前で言わないでいただけますか?」

「あ、ご、ごめん……」

「気にするな。全ては学園の平和のための行動だ。この動きを成功させなければ明るい未来は見えない」

「僕には既に明るい未来ってモノが想像出来ないよ」

「見ていればいいさ。そうすれば裕也にも明るい未来と言うものが分かるだろう」

「はあ……… やっぱり軌道修正は無駄なんだね………」

「何だ？ 声が小さくてちよつと聞き取れなかったんだが……… 何か言ったか？」

「なんでもないよ」

「なんでもないという感じではなかったと思うんだが……… まあ、良い。ソレよりも今は奴らの動きを予測する事が大切だ」

「良いですわ、こういうのは私の出番です」

「よつし、頼んだ」

弓は鞆からノートパソコンを取り出し、早速生徒会の行動を予測する。

俺と裕也はそんな弓を見つめ、ゴクリと喉を鳴らした。やがて数分後……

「できましたわー!!」

「やけに速いな……… どれ、ちよつと確認させてもらおうか」

「僕もちよつとだけ心配だから………」

「ふふん、これは中々の出来ですわ!! 存分に見るとよろしいです!」

と言うわけで彼女の作った生徒会の行動予測内容を確認してゆくのだった……。

「今年も俺達生徒会が発足されたわけだが……俺達はどのような行動を取るべきだと思う？」

生徒会副会長で序列2位、”流血のライト”が円卓に座りし周りの者達に対してそう聞いた。

それに一番最初に反応したのは生徒会会計で序列4位の”正夢のシヨーコ”であった。

「ふふふ、去年通りで良いんじゃないかしら？ 去年と同様に生徒に良い顔をして、魔術同好会を潰して……」

そんな”正夢のシヨーコ”に噛み付いたのはもう1人の会計、序列5位の”煉獄のトウマ”であった。

「ケツ！！ おれたちや生徒会だぜ？ そんなに魔術同好会にビビる必要はあるのかねえ……？」

「あら？ 去年のあたし達の魔術同好会との戦いを知らないなんてね……やっぱり新入生に生徒会はおろかな事なのかしら？」

「んだとお！？」

「シヨーコ、トウマ。すこし黙れ」

「はいはい」「ちつ、分かったよ……」

カイトの一言によって2人はしぶしながらも言葉を慎む。この生徒会では序列が上の者の方が権限が強いのだから仕方ない。

次にカイトは書記である序列3位である”寡黙のリョウ”に視線を合わせた。

「さて、リョウはどう思う？」

「……………さてな……………」

特に何かをかたることはせず、リヨウは眠るように瞳を閉じた。

「……………魔術同好会にだけ……………気をつける……………」

そして助言をするかのようにそう呟いたのだった。

「ふむ……………まあ、お前達の意見は大体分かった。どうされますか？
会長」

と、その一言で全員の視線が会長である1人の少女へと向く。
美しく、その二つ名と同じように凜とした少女……………彼女こそが序
列1位で生徒会会長である”恐怖のリン”である。

みんなのその視線は恐怖などさまざまな感情が伺える。
円卓という存在は全員が平等であるという事を示しているはずだ。
しかし、この生徒会では別の意味を持つ。

それは円卓にいる限りは全員が全員、その位を奪い合う事が出来
るという事だ。

つまり、チャンスは全員にあるということがこの円卓の机の意味。
しかし、生徒会長の座を狙っていた全員が彼女には叶わないと、
そう痛感させた1人の少女　それこそがリンであった。

「私達から打って出る事はしないわ。しかし、向こうが行動を起こ
すなら、こちらも容赦はしない……………そんな感じで良いと思うよ」

凜とした喋り方、あふれ出る才気、彼女こそが生徒会長にふさわ
しいと誰もが思わずにはいられない。そんな女の子。

リンがそう自分の意見を言い、全員は円卓を後にした。まだ仕事
をするには発足されてから時間が経っていない。あと少しするまで

は仕事もなく、簡単な顔合わせで一日が終了するだろう。
そして円卓に最後まで残ったのはリンであった。

「フフ、お兄様……必ずあなたは私が倒します……ええ、必ずですよ……」

殆どの人が帰った円卓に1人、リンの笑い声が響いていた……。

「こ、これは……」

「良い話した。さすが中々の出来と言っただけの事はある」

「そうですわよね」

「え、ええええええええええ？」

俺は素直に感動したというのに、どうやら裕也はそうでもないようだ。

顔を引kitsらせて1人悶々としていた。なんだ？裕也はこの物語の一体何が気に食わないというのだろうか。

「何所が気に喰わないというんだ？」

「しいて言えば全部だと思っよ」

「なんですって！？ 全部って……ハッ！？ 分かりましたわ……

貴方は私の溢れんばかりの才気に嫉妬して……！！！」

「いえ、あんまり弓さんに物書きとしての才気は無いかと」

「な、なんですって ！！！！？？？？」

あー弓さんがなんかどこかの劇画っぽくなってる……。真っ白で

瞳が失われたあの感じだ。

どうやら裕也に物書きとしての才能が無いといわれて普通にシヨツクだったようだ。

「まず、生徒会に序列無いし、二つ名がやたら物騒だし、凜ちゃん
は薫君の事を”お兄様”なんて呼ばないよ」

「そこはアレですわ。私の特別な力って奴ですわ」

そんなわけないだろ。

「面白そうな事……してるね……」

「おつ、恵理菜^{えりな}じゃないか。今日はいつもよりも少し速いんだな」
「昨日、本を読み終えたから……読む本が無いだけ………」

と言いながらここ最近読んでいた分厚そうな本が彼女の手元にはある。どうやらココで読み直す气らしい。

いつもの事なのであまり気にする事もない。

「……………」

つと、自分の席に座って本を読み始めてしまう。彼女、四宝^{しほう} 恵^え
理菜^{りな}はとにかく読書好きであった。

セミロングの髪に眼鏡をかけた少女。しかし、どこか神秘的で、
ページをめくる彼女の姿は何処かのアニメキャラに良く似ていた。
しかし、言っておくと宇宙人ではないのであしからず。

「ふう、相変わらず恵理菜さんはマイペースだね……それよりも、
恵理菜さんが来てるのに蜜柑^{みかん}ちゃんが来ないなんて珍しいね」

「そうですね……。いつも恵理菜さんよりも先に来ていますもの
ね」

「………………。まあ、きつとHRが長引いている
んだろう」

ちよつとしてしまった想像を打ち消すかのように俺は3人（2人？）に向かつてそう呟いた。

まさか、アレから数日が経っているのに未だにそんな事……。しかし、とてつもなく不吉な声と軽い悲鳴が隣から聞こえてきた……。

『あ、すいませーん…………遅れまし…………あ、』

『う、うわあああ！？　ちよつ、魔術同好会の1年じゃないのか！？』

『またか！！　魔術同好会の教室は隣！！　俺達にかかわらないでくれえ！！！！』

『ご、ごめんなさい、また間違えちゃいました…………（シユン）』

『いいからさっさと出て行ってくれー！！！！』

「……………またか……………」

「…………ん、蜜柑が来たようね……………」

恵理菜はどうしてそんなに落ち着いていられるのだろうか。

ガチャリ

「よ、よかったです…………ようやく同好会の教室までこれました…………」

「蜜柑、もう入会して数日も経っているというのに未だにこの教室の場所を覚えていないのか」

「はうう！！　だ、だってこの場所覚えにくいじゃないですか…………」
「そうでもないわよ」

入ってきた小さなツインテールの少女は五街道　蜜柑。
（ごかいどう　みかん）

俺達魔術同好会の最後の一人である。ただかなりドジッ子気質

があるようで、数日前から毎回部屋を間違えて怒られている。
ちなみに、本当にこの場所は分かりにくいという事はない。階段
の隣だと覚えておけば一発で来れる筈だ。

「ふう……もう何も言わん。さっさと席に座ってくれ」

「あおう、怒ってます？」

「いや、怒ってなどいないから、そんなに心配そうな顔をするな。
早く会議を始めるぞ」

「はいっ、すぐ座ります！！」

つと元気良く席に座った蜜柑。

気がつけば恵理菜も本に栞しおづを挟み、こちらの話しに耳を傾けてい
るようだ。

これでようやく同好会を始める事が出来る。

「さあ、では魔術同好会を始めようか」

「いつもその一言から始めるんだね」

「私の实力を見せ付けてやりますわ」

「……サーイエッサー！！」

「あ、あれ？ 恵理菜先輩のテンションがやたら高くないですか…

…？」

「……蜜柑、余計なことは気にしないで良い……」

コレが俺達、魔術同好会である。

第一話 魔術同好会の人達（後書き）

風邪ひいて辛いです……。

頭はガンガンするし、吐き気がやばいです。でも、書きます。
そこに物語があるから……グハッ！！ バタリ

第二話 魔術同好会会議

「で、薫会長」

「なんだ、蜜柑？」

「魔術同好会って一体何をするんですか？ 私はまだこの同好会に入って短いからよく分からないんですけど……」

そういえば彼女が入ってからやったことといえば、今のこの教室を掃除することくらいしかしていない。つまり、活動に関しては彼女は何も知らないということだ。それはまずい。

俺達の活動は世界の平和のために、目下の目標は学園の平和そのために生徒会を倒すことだ。

それに彼女には魔術と言うものが良く分かっていないかもしれない。魔術についての説明もするべきだろう。

「ふう……そうだな。今日の会議は魔術についての簡単なおさらいでもしておくか」

「そ、そうだね……。蜜柑ちゃんもいるわけだし、そのほうが良いかもしれないね……」

「いいですよ」

「……………そう」

「ふえ！？ あ、ありがとございまふ……」

皆が同意してくれた所で、今年度最初の魔術会議が始まる。

「まず、魔術を使用するには簡単に言って三つの要素がある。魔力、技術、それと一言だ」

「一言ってなんですか……？」

「うん、一言っていうのはね、ゲームとかでいえば詠唱っていうの

に良く似ているものだよ」

「へえ、そうなんですか……。じゃあ、魔力と技術と言っのは……」

？」

わたくし

「私が説明して差し上げますわ」

「……魔力とはその者が持つ魔法的な力を数値化したもの。……」

「技術とはその者が扱える魔術レベルのこと……」

「ちょ、恵理菜！？ 私が説明して差し上げると言ったのに何故貴方が説明するんですの！？」

「……似非風紀委員は黙っていればいい……」

「ムキィー！！ 私は風紀委員ではありませんわ！！ 大体、魔術を超能力と同一視する事が」

気がつけば何故か弓と恵理菜が言い争っている。いや、的確に言えば飄々と返す恵理菜に弓が食って掛かっている構図だが。

俺は小さくため息を吐きながら説明を再開した。

「まあ、つまりは魔術を操る際の体力の様な物《魔力》、魔術を操る特別な技術力《技術》、魔術を発動するための言葉《一言》ワードの三つが必要になるって事だ。分かったな？」

「え、ええ、なんとなくは分かったんですけど……。ところで、魔術と魔法って単語があると思うんですけど、一緒なんですか？」

「少しだけ違う……。って、お前ら！！ いい加減言い争っのはやめてこっちに帰って来い！！」

「はっ！！ ちょっとだけイラついて暴言を吐きまくってましたわ」

確かにお嬢様っぽくない言葉を言いまくっていたが。

「……カツとなってやった。……反省はしていない……」
「何でそんなにふてぶてしいんだよ！！」

恵理菜も少しは反省してもらいたい。

「はあ……まあ、いい。弓、彼女に魔術と魔法の話をしてやれ」
「分かりましたわ……。良いですこと？ 魔法と言うのはいわば魔術の中のひとつです。魔術の中の自然物に作用するものを私達は魔法と呼んでいますわ。逆に魔術とは、魔法や呪術、仙術などの総称と思ってくださって結構ですわ」
「え、じゃあ魔法とか呪術とか仙術って殆ど同じようなもの……ってことなんですか？」
「そうなるな」

広義とは少しだけ違うが、俺達にとっての魔術とはそんな感じだ。

「特に魔術の中で何が得意なのかで意見の相違などが生まれる場合もある。ちなみに俺は魔法が得意だ」

「僕は仙術だね」

「私も魔法ですわ」

「……呪術が得意……」

「ふえー、じゃ、じゃあ、私は一体何が得意なのでしょう……？」

「それは俺にもわからないな……。その辺はその内分かるだろう。今回は簡単に魔法の説明もしておくか」

「じゃあ、僕と恵理菜さんの出番は殆ど無いってことね」

「そういうことになるかも知れんな。すまん」

「い、いいよ、気にしないで」

「……本読んでる……」

恵理菜は先ほど呼んでいた本を読み始めてしまった。裕也のほうはこちらをジッと見ているような位置で観察しているようだ。

俺は弓と2人で蜜柑に魔法と言うものの説明を始める。

「まず魔法にはそれぞれ得意な物が存在する。コレが形状と属性だ」
「あの、薫？ その説明では普通に考えて分からないと思うのですが……？」

確かに蜜柑は頭に大きなハテナマークを浮かべていた。

「言葉を端折りすぎたか？ では少しだけ言いなおそう。まず魔法と言うのは形状と属性でさまざまな種類があり、その数は万を超えるとも言われている。しかし、俺達が使えるのはそんな万を超える種類の中の数種類程度なんだ。ソレが得意形状と属性だ」

「例えば私は形状が”壁”で属性が”風”ですわ。この壁と言う形状は攻撃よりも防御に向いた形状で、風と言う属性は形状を相手に視認されにくいという特徴を持っているのですわ」

「弓が”壁”で”風”なのに対し、俺は形状が”剣”で属性が”雷”だ。まあ、大体の意味は分かったろう？」

「な、なんとなくかな……」

「この万とある形状、属性の組み合わせの中で一番得意な物をその人間の形状、属性としている。まあ、そこから派生して少しだけなら別の形状や属性の魔法を扱うことも出来るが、やはり得意な形状と属性の魔法が一番楽だ」

「へえ……そうなんですか……」

「……………あまり気の無い返事だな……………」

「いえ、だってそんなファンタジーチックな事いわれても、魔法があるだなんて信じられませんよ」

そりゃそうだ。

「つまり、見てみないことには魔法のすばらしさが分からないと……いいだろう、弓、協力してくれ」

「分かりましたわ」

「今から俺が弓に向かって攻撃的魔法を放つから、それを良く見ておくように」

「わ、分かりました!!」

俺は弓から少し距離をとって構えを取る。右手を相手に向け、左手で右腕を掴む……魔法を知らないものから見れば「なにこの中二病」と言いたくなるようなポーズだが、仕方ない。

ゆっくりと息を吐いて、弓が小さく頷くのを確認して一言を^{ワード}呟く。

「雷の剣よ、破砕せよ!」

「壁よ、止め」

同時に弓も一言を^{ワード}紡いで魔法を発動させた。

「ッ !!」

俺の一言によ^{ワード}って発動した雷の剣は鋭い光のような一閃となり、弓の体を貫くように真っ直ぐと飛んでゆく。

バチイリ!!と大きな音を立て、弓に当たったかのように見えた雷の剣は次の瞬間には強い光を放って霧散。やはり簡単には破れないか……。

「え? ええええ!? な、なんですか今の!? 何か手からバビューン!!ってで、バチイリ!!って、ええええええ!」

「……さすが弓だな……俺の剣を簡単に塞ぎやがって……」

「壁は元々守るのに適した形状ですもの。そう簡単に貫かれては困りますわ」

「だが、俺の剣の形状だって斬る事や貫く事には適している。それをそんな簡単に……少し落ち込むぞ……」

「い、いや、皆さんなんでそんなに落ち着いて……えええ!? こ

んな現代に魔法だなんて……！！！」

「蜜柑、お前は今更何を驚いているんだ？ 魔術同好会なんだから、魔法のひとつやふたつあってもおかしくは無いだろ？」

「実際はもつと多いですけどね」

「だ、だって、魔術同好会って聞いたから、もつと毒々しい感じなのかなあと……悪魔崇拜サバトをしたり……」

「ああ、サバトは去年やった。生徒会が邪魔しなければ完璧だったはずだ」

「……あのサバトは元から不完全……」

「なに、恵理菜。それは本当か？」

「……印が少しズレてたし、生贄が少なかった……」

「生贄って、ええええ！！！？？」

「今日の蜜柑はよほど驚くことが好きなんだな。一か月分くらい驚いたんじゃないのか？」

「そ、そうかもしれません……」

コレが一般人と魔術を使う魔術師の相違と言った所か。難しい話だ。

「じゃあ、これで魔法の使い方とか、魔法の存在とかいろいろ分かったな？」

「いえ、何かもう逆に訳が分からないです」

「そうか……今日はこれ以上教えるのは無理かも知れんな……では、勉強はこのぐらにして、あとは遊びの時間としよう」

「遊び……？」

「薫君、遊ぶの？ だったら、僕と」

「裕也、やらないか？」

「えっ？ ちょ、か、薫君！？ 顔近い……！！」

「あわわわわっ！！ 薫会長と双葉先輩って、そ、そ、そういう関係だったんだ……なんか、BLEGEーみたいです……。やっぱり薫会

長が攻めで、双葉先輩が受けなんでしょうか……いえ、あえて逆と言つのも……」

「ちよつと、蜜柑！？ あなた何を考えているのかしら？」

「……桃色なコトだと思われる……」

「そ、そんな事考えてません！！ ほ、本当ですよ！？」

「ちよ、いい加減にしてよ！！ 薫君！！」

「なんだい？ そんなに俺に抱かれるのは嫌か……？」

「だ、だって、皆が見てるし……」

「なら保健室に行こう。あそこならベッドがあるし、この時間は誰も来ないはずだから、保険医さえ追い払えば……」

「う、うわああああ！！ ちよ、弓さん、恵理菜さん、蜜柑ちゃん！！ 誰でも良いから助けてよ！！」

この至福の時間を誰にも邪魔はさせない。男ならまだしも、女に邪魔などさせるものか！！

俺は他のメンバー達に睨みを利かせながらゆっくりと裕也に近づく。

「あああああ！！ り、リアルでBLが見れるなんて、す、すごいです……！！」

「はあああ。ちよつと薫！！ あまり男ばかりに目を向けていると、大人になった時にお嫁さんがいなくなるのではなくて？」

「ふふん。ならば裕也が女装して性別を女にしてくれば問題あるまい。そうすれば俺達は晴れて結婚できるぞ……？ なあ、裕也？」

フウウつと裕也の耳に息を吹きかける。

「あう、ちよ、か、薫君 そ、それ以上やると……」

「……………それ以上やると規制がかかる……………」
「ぐはっ！？」

コレからが本番だというのに、そんな俺と裕也の絡みを強制終了させる女が一人。

……ハリセンって思いっきり叩かれると意外と痛いんだな……。

「くっ、え、恵理菜……貴様、俺と裕也の至福の時間を邪魔するといつか……！」

「ぼ、僕にとっては全然至福じゃないんだけど……」

「……そういうサービスシーンは……別の機会にすれば良い……」

「別の機会だと……？ ふん、いつまでもチャンスが来るとは限らんだろう？ だから、出来る時にやるのが基本だ」

「だから今はその出来る時じゃなかったと僕は思うよ」

うるさい、裕也の意見なんて俺は聞いちゃいない。

「……今はまだ物語の序盤……あまりやるといんな人に引かれる……」

「またそういうメタ発言をしゃがって。そういうのはもうちょっとネタ的な部分でやれ。禁書 録だとか、シナだとか、とらラ！とか」

「なんで全部電撃……」

「俺の魔法属性が雷だからだ」

「絶対に関係ないと思うよ」

まあ、俺も絶対に関係ないとは思っが。

それよりも、さつきから俺達のほうを見て「あわあわ」言ってた蜜柑が大人しいんだが……。

「ちょっと蜜柑！？ 大丈夫ですよ！？」

「あははは……ぜ、全然だいじょうぶれふよ……？」

「鼻血を出して、嬉しそうな顔して倒れている人間の言葉とは思えないセリフですわね……！」

「べ、別にあの程度のＢＬで興奮だなんて……げふっ」

「ちよっ！？ え、衛生兵、衛生兵……！」

「………免疫が無かったみたい………」

「あはは………とりあえず薫君、蜜柑ちゃんが慣れるまでは僕に構う事はしない方が」

「絶対に嫌だ」

「ですよー」

去年は俺と裕也と弓と恵理菜の四人でこの同好会を行っていた。それはあまりにも少ない人数ではあるものの、それでもココが安らぎの場所だと思っていた四人だった。

でも、そんな同好会にも新たな仲間が入る。それが、五街道 蜜柑^{かん}。

正直言えば何でこんな普通の子がこの同好会に入ったのか最初は分からなかった。しかし………

「うううう………な、なんか鼻に詰め物って女の子がやってると全然可愛さも何も無いですよね………」

「………男がやってても最悪………」

「”も”って事は今の私は最悪ってことですか!？」

「………」

「何で誰も否定してくれないんですか!？」

はぐれ者な俺達にこんなにも接してくれる彼女は、もう完全に、俺達の一員といえる。

この五人が今年の魔術同好会。

これからがすごく楽しみだ………。

「ん？ 薫君？ なんかすごい悪者っぽい笑みを浮かべてるけど…」

「いや、これから裕也をどう攻略しようか悩んでな……」

「それを本人に言うつて言うのは、多分攻略難易度を急上昇させてしまふと思うよ？」

「ごもつとも。」

第三話 焦げと妹と夢の中

「ただいまー」

ガチャッと自宅の扉を開け、帰宅の挨拶。
小学生の頃から帰宅の挨拶をし続けると、クセになってしまった
ようで無意識の内にいつも言ってしまう。

あまり言う必要性を感じないだけにちょっと嫌な習慣かもしれな
い。

どうせ凜だつて帰って来て

「おかえりー」

「ああ、ただいま。……………ん？」

何故か俺の「ただいま」という一声に対して返答が来る。

俺は数秒間硬直し、動き出す。一体誰が今俺しかいないはずの家
にいると言っのか　！？

「誰だ！？」

と、リビングに潜入してみれば……

「あ、兄さん、お帰りなさい」

「凜っ！？　な、なんでお前がいるんだ……………！？　しかも、何で料
理を作ってるんだ？」

リビング奥の台所で妹の凜がトントントンと包丁でにんじんを切
っていた。

もう、何がなんだか分からない。自分が混乱していると分かって

はいるが、それでもその混乱を沈めることは出来なかった。

「んん？ あれ？ 昨日電話しなかったっけ？」

「何だと？ 電話……？」

俺の脳裏に昨日の電話の内容が思い出された。

時間は夜8時くらいだったろうか。俺は恵理菜に借りた魔術書が
思いのほか面白く、ずっと読み込んでしまっていた。

そんなに面白い本だったからだ。電話がプルルルと鳴っても俺は
本を握り締め、本を読みながら電話へと応答したのだった。

『あ、もしもし？ 兄さん？』

「おう、久しぶりだな」（ 相手が妹だと気づいていない）

『うん……久しぶりだね。元気にしてた？』

「元気、元気。それよりも急に電話してきてどうしたんだ？」

ピラリと魔術書を捲り、次のページを見た瞬間に俺は叫びだした
い衝動に駆られた。

そのページに書かれていた内容は俺の想像を絶するもので、俺の
形状、属性にとてつもなくマツチした魔術であった。

これはヤバイ……！

ゴクリと喉を鳴らし、文字を目で追う。

『それなんだけど兄さん……私をそっちの家で住まわして欲しいな
ーなんて……』

「えっと、何々……チャラフレル・ドウ・レ・ストレッチル……？」

「うち、コレを日本語訳せにやなんのか」

『兄さん？ 聞いているの？』

「ああ聞いている聞いている。別に俺は良いぞ」

俺としては「どうでも良いぞ」と言っただつたのだが、本を読んでいたせいか「どうでも」の部分を良い忘れてしまったようだ。

そしてそのままの意味に受け取った凜は……。

『うん、ありがとう兄さん。えっと、荷物とかは明日の午後持つていくから、よろしくね』

「ああ」

ガチャリ

「そうかつ！！ 今の技術をもう少し変更すればこうなるのか……ん？ そういえば今誰から電話かかってきたんだ……？ まあ、いか」

そして時間は現代へと戻る。

「しまつつつたあああああああ！！！！ 何俺は軽々とOKしてるんだよ！？」

「ど、どうしたの？ 兄さん？ まるでアニメの録画し忘れたオタクみたいな反応して……？」

「お前はアニメの録画し忘れたオタクの反応を見た事あるのか！？ って、そんな事はどうでも良い！！ 貴様、本当に俺と一緒にこ

の家に住むつもりか!？」

「う、うん。何か問題でも……?」

そんな本当に何が問題なのか分かりませんが首を傾げられても困るぞ!!

「いいか。お前がこの家に泊まるための問題点が二つある。まず一つ目、お前は生徒会長であり、俺はその生徒会の敵である魔術同好会会長だ。そんなになれなれしい事なんてしてられん!! 部下達に示しがつかんではないのか!？」

「いいじゃない。どうせ私と兄さんは兄妹なんだよ? 家族なんだから親しくても問題は無いと思うけど……?」

「それだけじゃない!! もうひとつの問題と言うのだ、お前が女で俺が」

……いや、俺は一体何を気にしていると言うのだろうか。

そもそも凜が女で俺が男なんて決まりきっている事。それを言うという事は俺が凜を女として見ている……?

もしも間違いがあつたらどうするのかと思つていふことなのか……? 何を馬鹿な。

俺と凜は兄妹だ。間違いなんてあるはずが無いし、俺が女に興味を持つはずなんて無い。そう、俺は自他共に認めるホモなのだから!!

では、一つ目の問題点が破棄された以上、俺に彼女を住ませる事を断る理由なんてひとつもなくなってしまふのではないだろうか? 元から断るなんて変な話だったのかもしれない。生徒会は嫌いだ、俺は妹自身がそこまで嫌いなわけではないのだから。

「ふうう。分かった、俺はあまりお前が住むことに関して口は出さないが、親父やお袋はどんな反応を示してるんだ?」

「……知らないよ……あんな人達……。元々兄さんを捨てていった人達なんだもん……もう、知らない……」

暗い表情でそう語る凜を見て、俺は疑問符が浮かんだ。

確かに両親は俺を捨てた。皆で住んでいた今の俺の家を俺だけを残して彼等は何処かへと引越してしまったのだ。まさか学園で凜と一緒にいるとは思わなかったが。

だが、俺に比べて凜はかなりの家族想いだっただけだ。なのに家族を置いて俺の家に来るなんて変なんじゃないか……？

「なあ、凜……何があつた？」

直球勝負！！

「……………ちよつとね……………」

だが、球はズレてボールに！？ 明確な答えなんてもらえなかった！！

それどころか凜からは「聞くな」的オーラがビンビンに溢れ出ている。これは気安く聞けるような話題ではないようだ。

「ふう、お前がここに泊まることは了承した。元々この家は俺だけの物ではないし、皆で住んでいた大切な場所だ。俺はお前を拒まないさ」

「うん……ありがと、兄さ」

「ただ問題があるとすればだ」

「えっ？ も、もしかしてやっぱり何か嫌……だったかな……？」

俺は原因が分かっているのにもかかわらず少々遠まわしな表現をする。

心配そうにオロオロする妹を見ると少しだけ楽しかった。もしかしたら俺はサドかもしれない。

ニツコリとしながらこちらを見ていて料理に身の入っていない妹に言う。

「焦げ臭いぞ」

「へ？ あ……あああああ……！ わっ！ ど、どうしよう！？ 焦げちゃってるよう！？」

「そりゃあ、あれだけ喋ってたんだ。そっちの方を見てなかったら焦げるに決まってる」

「何冷静に言ってるの！？ あーあ……今日は兄さんの好きなハンバーグにしようと思ったのに……焦げちゃった……」

「なん……だと……！？」

ハンバーグは俺がもつとも好きな料理である。それを焦がしたただとう！？

「まで、凜よ！！ ハンバーグを焦がしたなんて……お前、本気が！？」

「お兄ちゃんがはやく教えてくれなかったからだよ！？ あうう……残り一個分くらいのハンバーグを半分にして食べれば問題ないかな……？」

「どれ、見せてみる。どれくらい焦げたんだ？」

職業柄ゆつくりと近づくのは慣れているので音も立てずに近づく。フライパンの中を見ると焦げの臭いは確かにその物体から発せられているようだ。黒っぽいその物体から……。

「どれくらいって……ちょ、近いよ！？」

「ん？ ああ、すまん。こちらの方が近かったから、お前を見下げ

るようになってしまっていたな……すまん」

凜はあまり背の高い方ではないので、少し背が高めの俺からしてみれば頭一個ほど違う。そのため、凜を中心に覗き込むように俺はフライパンを見ていた。

そこで凜が俺の方を振り返ってビックリするのは当然だろう。いきなり目の前に大きな人間が立っていれば誰だって驚く。

俺は謝罪を述べながら少し横に移動する。すると、凜は俺にフライパンの前を譲った。

「あーコレぐらいなら焦げている部分を少し削れば食えるさ」

「そ、そうかな……？」

「大丈夫だ。俺はハンバーグが好きだからな、多少焦げていたって全然気にしないさ」

「う、うん……ごめんね、兄さん」

「気にするな」

ポンポンと軽く叩くように頭を撫でてやると、猫のように目を細める凜。この子はあの時から全然変わっていないようだ。

俺は少し安堵しながら料理の全体的な進行を見る。

「……ご飯はもうちょつとかかりそうか？」

「さっきまで荷物の整理してたから、もうちょつとかかるかも……おなかすいた？」

「ああ、もうお前を食ってしまいたいくらいには腹が空いている」

「か、カニバリズム！？ それはちょつと物語にも出来ないようなドロドロとした感じになっちゃいそうだよ！？」

「安心しろ。ネットの噂では人肉は意外と美味いらしい」

「その何所に安心できる要素があるの！？」

「俺が美味しいと思うことがお前の幸せ……みたいな？」

「そこまで献身的じゃないからね!？」

ふむう……。やはり曇った表情よりもこうやって笑っている凛の方が可愛い。実際、同じ三年生なので彼女の噂をクラスメイトからたまに聞くのだが、かなり男子に人気があるそうだ。俺に対してはこうやって甘えてくれたり、時に厳しかったりする。しかし、ひとたび学校に出て生徒会長という役職に就くと人が変わったかのように感じる。完全に別人のレベル。

それほどまでに彼女は今の生徒会長という役職を真面目にやっているのだろう。

だが、生徒会長をやっているときの凛は俺の知っている凛じゃない。まるで凛が遠くに行ってしまったかのように錯覚してしまう。そんな筈なのに、そう感じてしまう。

「じゃあ、晩御飯が出来るまで俺は自分の部屋で待機してるよ」

「うんっ、楽しみにしててね兄さん」

「おう」

言って俺は2階に上って自分の部屋に入った。暗い、暗い、そんな自分の部屋に入り、電気をつける。

気^けだるい。

手足が麻痺したかのように感覚が薄れてゆく。そのままゆっくりとベッドに近づいてダイブ……はせずに倒れこむ。

体を動かしたくない。

病気なんかではなく、先ほどの凛への心労なんかもなく、これは”反動”。魔法を使ったことによる”反動”。

「……………」

いつもはこのまま眠ってしまうのだが、今日は寝てしまうわけに

は行かない。妹が……凜がご飯を作って待っていてくれるのだから。

思いとは裏腹に落ちる瞼。

そして俺は……落ちた……。

「お兄ちゃん!!」

それはいつだったか、妹^{リン}が俺の事を”お兄ちゃん”と読んでいた頃の記憶。

”俺”がまだ”僕”だった頃の記憶……。

記憶と夢が混濁する。川のように緩やかな、それでいてとても穏やかな流れの中に俺はいる……いや、僕はいる。

ああ、混ざってゆく。僕が……俺が……記憶と夢が、混ざり、区別がつかなくなる。

「凜、ほら、はやくこないとおいてくよ?」

「まってよ、お兄ちゃん!!」

僕は妹の手を引いてある場所を目指していた。

そこは良くホラー扱いされる廃工場で、お父さんもお母さんも危ないから近づいちゃダメって言ってた。けど、僕は凄くここが気に入ったんだ。

それで妹と一緒にここに来たわけなんだけど……入ろうとした瞬間に一瞬考え直そうかなって思うくらいには不気味な工場だなあ……ここは。

「お、お兄ちゃん……本当にはいるの……？」

「う、うん。だ、大丈夫だよ。僕がついてるから」

「うん……」

妹は心配そうにギュッと僕の手を握った。それを握り返してゆつくりと廃工場の中へと入ってゆく。

中は薄暗い。まだ日は高かったはずなのにこの中では夜のように感じてしまう。それがさらに怖さを掻き立てた。

でも、好奇心旺盛だからなのか、それとも妹がいるからなのか、さらには別の要因があるからなのか僕は怖くても道を進む。

ドラム缶。割れた窓。剥き出しの電線。鉄材。

ここが何の工場だったかは誰も知らない。ただ一言”廃工場”と呼ばれる場所。

「お、お兄ちゃん……怖いよう……」

「大丈夫だよ、なにもいるわけないじゃん」

僕も少し怖かったが、妹が怖がっているのにお兄ちゃんである僕が怖がるわけにはいかない。

やがて、視界が開けたとき、僕が見た モノ ソレハ

イ ハ ノ ニ テヲ スル

「 ツー！ ……………。……………」

「兄さん？ そろそろご飯出来るけど……もしかして寝ちゃった？」

1階から響く妹の声。どうやら少しだけ眠ってしまっていたらし

い。

「ああ、少し眠っていたみたいだけど今起きた。大丈夫だ、問題ない」

「装備は多分関係ないと思うけど、じゃあすぐに盛り付けちゃうね」

凜の声を聞いて安堵。ん？ 俺はなんで安堵をしたんだ？

ただ少し眠っていただけなのに何故か寝汗をビッシヨリとかいてしまっていた。何か嫌な夢でも見たんだろうか……？

とりあえず俺は服を着替えてリビングへと移動する。

「さあて、今日の晩飯はハンバーグだったな！ 楽しみだ!!」

「焦げちゃったけどね」

「……………そうだったな。いや、アレぐらいのこげ問題ないさ!!」

「……………ガンで死んだら後は頼む…………」

「に、兄さん!？」

焦げは発癌性物質なのだそうです。皆さんも気をつけようね、テヘッ

……………こんな締めで良いのだろうか…………

第四話 生徒会での物語（前書き）

この物語は基本的に、薫と凜の2人が主人公となり、魔術同好会側と生徒会側の両方から物語が進んでゆきます。

第四話 生徒会での物語

私立蓮邦学園と呼ばれる学園がある。学力もそこそこで、品性もよいといわれている。PTAも良い顔をする学園だ。

多くの部活動があり、多くの学科がある。

そんな学園の生徒会長である私はいつも……と言うわけではないが、激務に負われる事となる。当たり前の話だ。

特にこの学園は生徒会に回る仕事が一般の学校よりも多いらしく、かなりの量をこなさなければならない。とは言え、生徒会だって生徒だ。その辺は過去の生徒会入りしていた人の親が出てきて、今では昔の分量の約3分の1程度にまでは抑えられていた。

職務怠慢だなんて思わない。だって、そんな量の仕事 cameたら私に出来る事が減るのだから。

ただでさえ去年から兄さんの魔術同好会とも争っていると言うのに……。

私 一堂 凛

が生徒会室に入ると、そこには女子生徒

一人しかいなかった。

「あれ、翔子さんだけですか……？」

「ええそうよ。当真も海斗も流もないわ」

「そうですか……。皆さん今日もちゃんと来るのでしょうか……？」

「海斗は義理堅いし、流は職務に忠実。当真は私が無理やり来いって言うてあるから、来なかったら殺すし……ふふっ」

「……笑顔が怖いです、翔子さん……」

彼女は箕原 翔子。私と同じだが、私以上に長い黒髪をした女性的な女の子。

女性的と言うのは彼女は美しいが、美少女と言うよりも美女に見えると言う事だ。決して老け顔と言うわけではない。

私は彼女のような、全てを優しく包み込むような表情も、胸も無い。女として悔しいとも思ってしまう。

考えるとちよつと気になってしまった……。

「……会長？ 自分の胸をポンポンと触って あん、きゅ、急に私の胸を触らないでください……」

「あ、ご、ごめんなさい。どうしても気になって……」

「あら？ もしかして胸が大きくなりたいのかしら？」

「そんな事は ツ！？」

わしっ、モミモミ

「確かにお世辞にも大きいとは言いがたいですが、私としてはこのぐらいの胸も好きですよ？」

モミ、モミ

「や、やめ………あう………」

急に胸を揉んだ事への仕返しなのか、翔子さんは私の胸を揉んできた。

それも、痛くなく、ちよつと会館をもたらすような微妙なソフトタッチ。

翔子さんがレズだという話しは本当かもしれない……だとすれば、今の状況はワニの口に頭を突っ込んでいる様な物ではないだろうか……？

だとすれば、ヤバイ……！

私の中の危機察知能力を発揮する。

「うう、ちょ、そんなに揉ん ひゃあ!？」

「ふふつ、私からそう簡単に逃げられると思わない方が良いわよ……?」

「いや ……!」

ちよつと本気悲鳴。^{マジ}

このままだと私の大切な物を翔子さんに散らされてしまう ……!!
翔子さんの手が私のブラウスのボタンとボタンの間をスルリと入り込み、直に胸に触ろうとした、その時

「あなた達は……何やってるんだ?」

ジト目で私達の行為を見つめる男子一人。彼は四宝^{しほう} 流^{りゅう}、生徒会の一人だ。

私は助かったと思い、翔子さんから離れようとして グイッと腕をつかみ、引き込まれた。

「えう!？」

「流、邪魔しないで頂戴。これは私と会長のスキンシップなのよ」

「ふう……私は邪魔しない。しかし、あまり煩くしないでくれよ。」

私は煩いのは苦手なんだ……」

つと、私の助けてコールすらも聞こえない（正確には見えない）

ようで、彼はスタスタと自分の席に座って本を読み始めてしまった。

量子^{りょうじ}……いや、よそう。彼が何の本を読んでいるか知ったところで、私の危機的状況は変わらないのだから。

親しみすら感じるほどのニヤニヤをしながら胸を触ってくる翔子さん。

その手つきはまるで私を焦らすように……

「いい加減にしろオオ！！　　ってか、会長もそんなに落ちそうな表情をしないでください！！」

「ハッ！？　　しょ、翔子さん！！　　あまり私の胸に触らないでください！！」

「ええ〜？　　だつて、私みたいにおつき子を触るより、私としては会長みたいに少し小さいくらいを触るほうが好きなのに……」

「そんな事聞いてません！！」

「だいたい、海斗かいとはいつから私たちの行為を見てたのよ。いる事すら気がつかなかったわ」

「流と一緒に入室したんですけど、ちょっと固まってただけです」

心なしに彼の顔が赤い。

ずつと赤いまま扉で話しを続けているのは、生徒会副会長の風村かぜむら海斗かいと。

かつこ良くはあるがどことなく苦勞人。イケメンではあるものの、短髪でスポーツマン風のカッコいい男子。

ただ、やっぱり苦勞人。

「……風村、煩いぞ」

「ああ、すまん流。ただ少し我慢していてくれ……俺のために……こいつらを説き伏せる！！」

「別に女同士でナニしてようが構わんと思うが？　　どうせ私たちに関係ない」

「そうよ、そうよ。会長だつて私の事を求めてくれそうになっただから」

「すごく不名誉な言い方ですね！！」

「えええい！！　　そんな事ばかりしているから『生徒会（笑）』とか言われるんですよ！？」

「え、私たちそんな風に呼ばれているんですか？」

「かなり限られた一部ですけど呼ばれていますね」

「……………私は知らなかった……………」

本当に呼ばれているか若干怪しいが、呼ばれているとしたらかなり問題だ。『生徒会（笑）』とか……………

「そついうわけなんで、今日は俺の講義を聞いてもらいます!」
「こつぎいゝゝゝ?」

翔子さんがごくメンドクサそうな声を笑顔で放つ。逆に、もう怖いくらいな笑顔だ!!

私は正直言えばどっちでも良いが、今日は急いで帰らなければならぬ。早めに切り上げてもらおう……………

「海斗君、今日私は用事があるから、かなり手短にお願いね……………」
「うっ、会長が上目使いでそんな表情されると……………」

「海斗ッ、やるなら早くしましょう?（余計な事は言つな）」

「は、はい!!（怖えええ!!）」

何かを呟きそうになった海斗君を翔子さんは黙らせ、会議は進む。

「まず、俺から発言したいのは翔子先輩の性的行為です」

「何かしら?　もしかして何か問題のある行為でもしていると言うのかしら?」

「問題だらけですよ!?　女の子同士でエッチなことをするのは俺はいかがな物かと思えます!!」

「つまり、海斗の言いたいことは、エッチなことをするなら男女間でちゃんと子作りさせる……………と……………?　貴方は同姓愛を否定するのね……………。同姓愛は人間として欠陥があるとか、そういうことを言うつもりなのね、残念だわ」

「……………風村、そういう発言はダメだ……………」
「……………同性愛……………」

一瞬寒気のような物が走ったが、気にしないこととした。
何か私の周りには同性愛者が多い気が下が、それも気にしないことにした。

「真つ向否定はしませんが、せめて場所を選んでください!!」

「つまり、自分の見えないところでやれと……………。貴方は戦争すらも見も聞きもせず、募金もしなさそうなタイプだものねえ」

「……………風村、そういう発言はダメだ……………」

「海斗君……………ちゃんと募金はしないとだめだよ……………」

「何でみんなの中の俺の像はそんなに鬼畜男なんですか!？」

叫びまくっている海斗君を見ると、やはり苦勞人だなあ……………とシミジミ感じてしまう。

単なる弄られ系キャラなだけかもしれないけど。

「まあ、性の事はもう良いです」

「性交の話しなだけに、説得は成功しなかったな……………フツ」

「いや、流!？ そんなに面白いギャグでもなかったからね!？」

「なん……………だと……………!？」

驚きに目を見開く流君。本人はかなり大爆笑のネタだったようで、いつもは無表情な彼もかなり驚いていた。

……………流君は本当によく分からない人だなあ……………。

「次の問題は流、君だよ!!」

「なんだ？ 私に何か問題でもあったのか……………?」

「君はマイペース過ぎるんだよ!!」

「そうか……………何か悪いのか……………」

「間長っ！？ ちょっとリアクションに困ったよ、俺……。いいかい、マイペースなのは良いことだけど、過ぎるのは悪い事なんだよ」

「……どう悪いんだ……」

「いつも他人のことは気にしないし、今回の二人の行為だって止めに入らなかった上に黙認したじゃないか」

「……別に止める必要はないだろう」

「不純異性交遊は校則で禁止されてるんだよ！？」

「……同姓だから問題ないな……」

「不純でしょ！？」

「不純なのか？」

「私は不純じゃないと思っているわ。もちろん」

「……………ノーコメントで……」

本当に何もコメントできません。

「流も少しは本読むのをやめて、外の世界に関心を持つてみたらどうなんだい？」

「……私はたとえ世界が崩壊したとしても本を読んでいるさ」

「すごいっ！！ そんな事できるなら、俺が止めに入る事は出来なさそうだ！！」

「……人類が消滅していったとしても読書しているだろう」

「人類何とかしようよ！！」

「むしろ崩壊する世界をバックに本を読んでいる私……これは映画化だな……」

「出来ないよ！？」

「全米ナンバーワンヒット……見えるな……。この話はノンフィクションです……とか」

「世界崩壊してたら全米ナンバーワン取れないよ！？ アメリカな

いんだから!!」

「っ!!」……………盲点だった……………」

愕然とする流君を尻目に「はあ、はあ、はあ、はあ」と荒い息を吐く海斗君。どうやらつつこみ疲れのようだ。

私自身も少し変わっている流君のその性格の片鱗を見てちよつとビククリ。

本当にこの人はよく分からない……………。

つと、そこまで話が進んだところでカチャリと扉が開き、生徒会最後の一人が入室し

「チーッス、遅れま　グハッ!?!」

「遅いわ。ボケ」

ようとした所で翔子さんの投げた招き猫の置物が彼の腹部に激突。かなり痛そうだ……………。

「ウゲオオオオオ!?!　ちょ、あ、姉……………貴……………?」

「当真、私がいと言ったら犬のようにサッサと来る……………そう教えなかったかしら?」

「翔子先輩……………その招き猫……………銅製ですよ……………?」

「……………同性愛者の投げた銅製の……………どうせ、いまのギャグもつまらんとか言うのだろう……………ククッ」

「だからそんなに面白くないよ!?!　君のギャグ!?!」

「なっ!?!　そんな馬鹿な……………!?!」

本当に騒がしい場所だ……………。

私はこの生徒会の中を他人事のように見つめたのだった……………。

(これは『生徒会(笑)』とか言われても仕方ないかもしれない)

そう素直に思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5501p/>

魔術同好会！！

2010年12月24日12時55分発行